江間（えま）　敏雄（としお）さん

細江まちづくり協議会　会長

［江間敏雄さん］
市民協働を実現していくためには、適切に行政が地域に入っていくことが重要だと語る。

●地域の声が活きるまちに

細江まちづくり協議会の活動を通して、まちの発展に尽力をしていきたい。先日、細江公園美化再生プロジェクトとして、2 日間、展望台の洗浄、遊具のペンキ塗り、公園内の芝刈などを中学生と理事で実施した。細江公園には、天皇陛下の歌碑などが設置されている。周辺の地域が力を合わせて、総合的な観光資源を開発していければと思う。

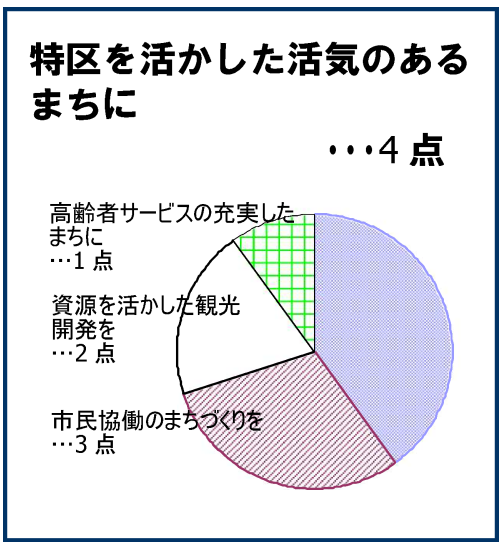
行政にもリーダーシップを発揮して、地域の発展に力を貸していただきたい。そのためには、もっと行政の人間が地域の中に入ってきて、現場を見て、感じてほしい。現在は、「市民協働で築く未来にかがやく創造都市浜松」の具体的な姿は見えていないが、地域と行政の関係性を確立していきたい。

●魅力のあるまちづくりが必要

観光面の魅力発信が弱いと感じている。浜松には浜松城も浜名湖もあり、観光資源はある。浜松城をシンボルとした中心市街地のまちづくりや、奥浜名湖の景観を活かしたまちづくりには、開発の可能性が多く眠っている。若いアイデアも取り入れつつ、まちづくりの設計をしていってほしい。また、国の特区制度を利用して、農業、林業、商業、産業、観光業において特色を活かす、特徴的なまちづくりができたらよいと考える。子育て支援を充実させるための子ども特区も考えられる。

●安全で安心して暮らしのできるまちに

高齢社会になれば、行政の力だけで地域住民の暮らしを支えていくことは限界がある。地域住民が交流する場を増やし、助け合って暮らしていく必要性が高まると考えている。しかし、将来的に企業の退職年齢は 70 歳になると予想しているが、定年するまでは地域活動に従事することは難しいだろう。そうなれば、ボランティアや市民活動団体は人材難を迎えてしまう。高齢者サービスの有償化なども含め、検討すべき課題は多い。



【浜松市への期待度グラフ】

●NPO 法人としてまちづくりを！

地域の力を現状よりも発揮していくために、NPO 法人の設立を計画している。

設立のためには、拠点の確保や資金の確保などの苦労も多いが、今までのまちづくり協議会ではできなかった事業の実施や、行政と積極的に関わるためにも、なんとか実現させたいと考えている。

太田（おおた）　昌孝（まさたか）さん

有限会社カネタ太田園代表取締役

［太田昌孝さん］
30 年後を背負う子どもたちが安心して成長できる浜松市であってほしいと語る。

●浜松は農業のまちでもある！

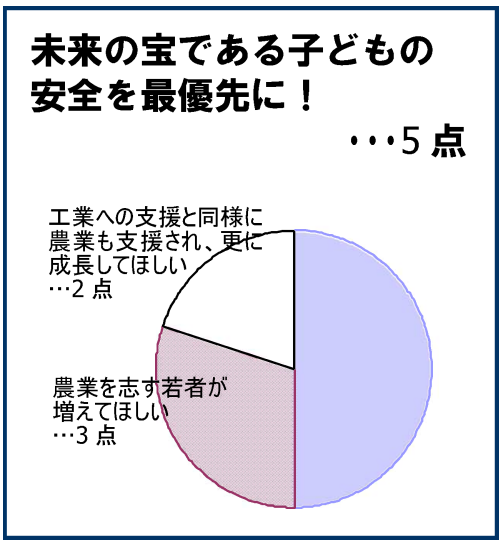
浜松市はものづくりのまちとして全国的にも有名であるが、農業のまちでもあることをもっと知ってほしい。天竜の山はお茶づくりに適しており、品質の良いお茶ができる。私が農林水産大臣賞を受賞してからは、全国から視察が来る。先日はフランスからワインづくりの専門家が視察に来て、葡萄づくりとお茶づくりは共通点が多く、意気投合した。地域や国籍に関わらず、同じ思いで農業をしている人と会話するのは本当に楽しい。農業に恵まれた環境があり、市町村合併により都市の規模が大きくなったのだから、行政が販路開拓に本腰を入れれば、浜松の農業はまだまだ伸びる。

●子どもは日本の宝。地域を挙げて守る！！

未来を担う子どもは日本の宝である。地域をあげて守る必要がある。小中学校は学区が設定されており、選択の余地がない。規模の適正化も理解できるが、安全面、環境面に最大限配慮した学校であってほしい。

●7 分 7 日 7 週間

7 分 7 日 7 週間という言葉をご存知だろうか。人間は酸素が 7 分欠乏すると生存できないと言われており、水は 7 日、食糧は 7 週間口にしないと生存できない。酸素も水も食糧も中山間地域で生産されており、都市部の人は酸素と水はタダだと考えているようだ。中山間地域で生活しているからという訳ではないが、都市部の人は中山間地域に借りがあるという意識を持つことも大切である。その中山間地域の活性化のためには、若い就農者が増えることと、美しい自然を守ることが大切である。農地を増やすとは言わないまでも、減らさない取り組みと、環境が悪化するまで放置するのではなく、美しいうちに保全する取り組みが重要である。



【浜松市への期待度グラフ】

●行政と市民の距離を縮めたい

行政が市民に事業の説明を行う際には、相談ではなく、決定事項の報告がメインになっている。これでは市民は意見を言っても仕方がないと考え、役所と市民の距離感は広がってしまう。道路修繕の要望なども、市民一人ひとりの要望を確認していてはキリがないのは理解できるので、自治会を通じての要望などはできるだけ速やかに対応してほしい。市民としても不要な要望をしているつもりはなく、生活に密着しているからこその要望である。このようなやりとりを経て、役所と市民の距離も縮まっていくのではないか。

大平（おおひら）　展子（のぶこ）さん

NPO 法人夢未来くんま副理事長・事務局長

［大平展子さん］
地域を愛する人が住み続けられるよう、官民一体となり、工夫を凝らすことが必要と語る。

●過去との絆、未来への絆

東日本大震災以降、絆という言葉が脚光を浴びている。

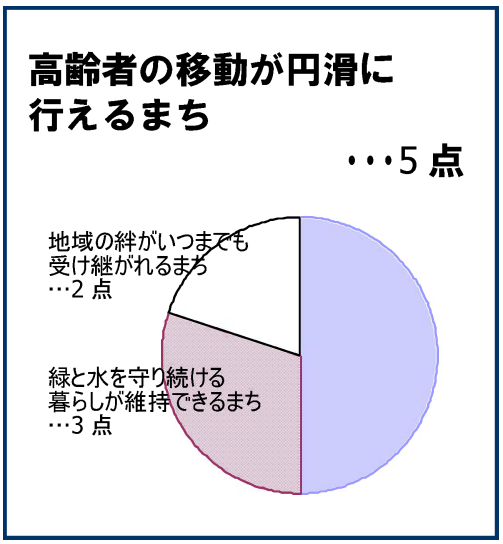
この地域には、それ以前から、絆が備わっている。今を生きる人たちの横のつながりだけでなく、昔からこの地域で生活をしていた人たちから、技術、文化、生活様式などに加え、何よりも「この地域が好き」という思いの結晶である絆を受け継いでこの地域は成り立っている。未来へ向けて、この絆と、人々を常に見守ってくれる豊かな自然を受け渡していくことが、私たちの使命である。

●定住人口を増やすには、人が住み続けていることが大事

天竜区熊の地域には、60 年前は約 2,500 人が生活していた。30 年前には半分の 1,300 人程度になり、現在の人口はその半分程度である。このままでは、30 年後にこの地域に住む人は、300 人程度になってしまうのではないか。近年、田舎暮らしが注目を浴び、I ターンで移住してくる方もいる。しかし、職場、医療機関、学校がなくては、希望はあっても生活に不安があり、移住に踏み切れない人もいる。人がいなくなってしまった地域には、人を呼び戻すことはできない。地場産業を育成し、医療、学校についても廃止の前に存続のための工夫を凝らし、今の暮らしを維持することが大切である。

●健全な家庭が増えていく地域づくりを！

少子化、晩婚化などが全国的な問題となっている。最近では婚外子の相続格差を巡る裁判も話題となっており、家族について改めて考える時期が来ている。人口を維持するためには、1 世帯に 3 人の子どもが必要と言われているが、家族が健全に暮らしていくためにも、そのくらいの子どもの数がちょうど良いのではないかと考える。将来の浜松を担う子育て世代や子どもたちが安心して暮らせるために、官民一体となった地域づくりが求められている。



【浜松市への期待度グラフ】

●現場を見た政策立案を

浜松市は全国で 2 番目の広大な面積を持つ。行政の職員も、市域の隅々まで自分の目で見た人はほとんどいないのではないだろうか。公平、公正を重視し、平等な市民サービスを行うのが行政の仕事であり、重要なことである。しかし、これだけ広大な面積の中には様々な地理的条件がある。例えば、人が 500 メートル移動するのに、まちなかの平坦できれいに舗装された道を歩くのと、常に起伏のある中山間地域を歩くのでは、大きな違いがある。行政によるルールづくりや政策立案の際には、現場感覚を持ち、地域特性に合致したものとなることを期待する。

大村（おおむら）　淳（じゅん）さん

遠州トランジションタウンの言い出しっぺ
ヨガインストラクター

[大村淳さん]
スポーツジムで働いた経験を活かし、現在はヨガインストラクターとして活躍している。

●トランジションタウンって？

世界で 1,800 地域を越える。我が国では 30 を超える地域で立ち上がっている。市民レベルの草の根的な取り組みであるが、グローバル経済や化石燃料に頼らない持続可能な社会への移行を目指すもので、自給自立の地域づくりをボトムアップ形式で進めている。

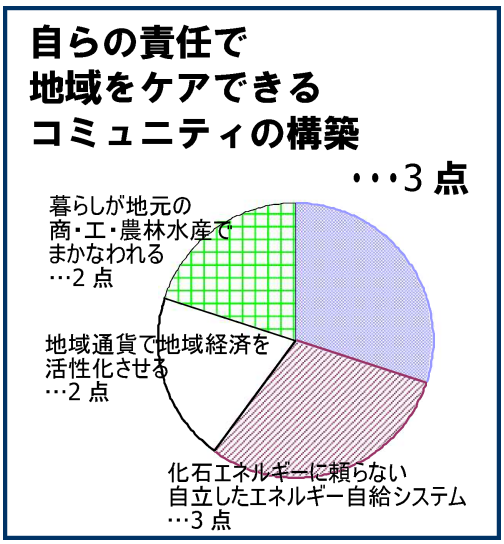
参加者は、自分の好きなことに取り組んでいて、綿花を栽培する綿部、自給自足の暮らしを目指す畑部、様々なエネルギーピークを見据える中でエネルギーのシフト＆ダウンを進める遠州電力、畑部と連携したマルシェ部など、多様な部門に分かれて活動している。社会的なインパクトは把握できていないが、意欲ある参加者の力で満ち満ちている。地域通貨も試験的に実施中。単位は 1UNA。ドイツでは、日を追うごとに通貨の価値を下げ、流通を促進することで経済を活性化させた画期的な事例もある。実験は 3 か月目に入るが、地域でしか流通しない通貨システムを、まずは実感してみようと考えている。遠州トランジションタウンブログ：http://tthamamatsu.hamazo.tv/

●言い出しっぺになった理由

若い頃、ユーラシア大陸を陸路で横断する旅をした。そこで生活する人々は、モノがなくても笑顔が溢れ、身の回りの自然とともに繋がり安心感に包まれ暮らしていた。一方、日本では、モノに溢れているのに自殺者が多い。そんな日本の社会とのギャップを痛烈に感じ、幸福とは何かを考えるようになった。そんな時に出会ったのが、パーマカルチャーという考え方。自然のメカニズムをライフスタイルに取り入れ、自給自立ができる状態にデザインする手法である。

まだまだ修行中の身ではあるが、浜松は、日本の縮図であり、手入れをすれば価値を生み出せる自然に溢れており、デザインのしかたで大いに可能性を感じる。

今後も何かしらの形で持続可能なデザインを浜松に施していきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●アラナイを探せ！30 年後に向けて

これは、トランジションタウン鎌倉の取り組みである。90 歳前後の高齢者は、石油に頼らない時代を過ごし、高度経済成長期を引っ張ってきた。知識の塊である。持続可能な社会においては、ケアしなければならない存在から創造的な存在に変わる。

また、1 人暮らし世帯の増加が課題になるが、空き家などを活用して、共同生活する場を築くことも効果がある。北欧で生まれたコーハウジングといった考え方。家族同様の共同生活の場をつくることで、1 人で暮らす大変さを軽減することができる。

岡部（おかべ）　佳忠（よしただ）さん

双竜木材株式会社取締役部長

［岡部佳忠さん］
消防署員と消防団員のコミュニケーションがなによりも大事だと語る。

●市民の大切な財産「森林」を災害から守る

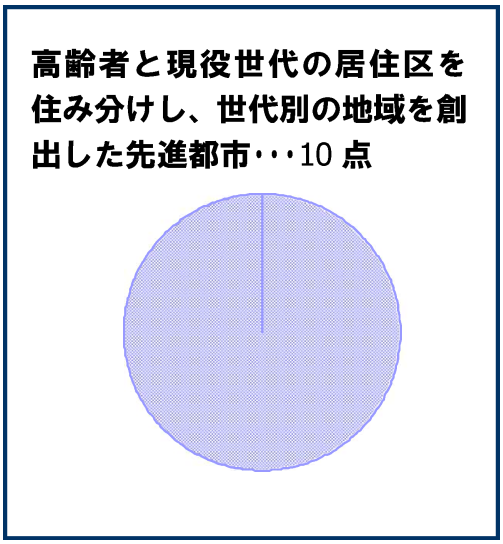
中山間地では人家の災害に対する意識は高く、天竜区では住宅用火災警報器の設置率が約 90%で、道路が分断されたときには山道を活用するなどの備えもできている。こうした人家の生命や財産を守ることに加え、森林資源の保守も重要である。森林は木材だけでなく、都市部の生活や産業に必要な水を涵養する役割もあるので、山火事の予防はもちろん、火災発生時には延焼を最小限に止めなくてはならない。森林は大切に守って、育てる財産であることを認識し、山間地域特有の災害に備え、特殊な資機材の確保、消防ヘリコプターの出動など万全の態勢を整えてほしい。

●コミュニケーション促進で官民一体の防災を

災害から地域を守る消防署と消防団は、生命財産を守る両輪である。しかしながら、両者は幹部で協議する場は多いが、現場の最前線で活動する署員や団員が顔を合わせる機会は少ない。このため、災害発生時に一体となった行動が円滑にできないことが危惧される。また、火災現場（特に山間地）によっては水の確保について、署員よりも団員の方が詳しいときもある。機能的に連携してスムーズな活動を遂行するためには、お互いコミュニケーションを図って、フォローし合える意識付けが必要だと感じる。

●木材の新たな活用で森林資源を有益に

大切な財産である森林は伐採・植林などの循環によって、その機能が保たれるのだが、近年は地域材の需要が減少し、供給過多となって伐採ができないため、山林の荒廃が進みつつある。荒廃した山林の（手入れされていない）木材は、住宅資材に適さないので悪循環が生じる。山林を荒廃させないためには、木材の新たな活用方法を研究開発することが不可欠である。木質バイオマスで市民のエネルギー支援を確保できる先進的な都市づくりなど、住宅資材に頼らない新たな活用方法を見出してほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●超高齢化を見据えた先進モデルへ

超高齢化する浜松市の将来推計には誰もが不安を感じるが、これは日本全体の課題と認識している。常識的な政策にとらわれず、たとえば、居住区を高齢者と現役世代に住み分け、地区に合わせた政策を行うのはどうか。高齢者が集う地区ではその支援を充実させる。子育て世代に特化した地区では、子どもを育てやすい政策を行う。同じ境遇の市民が存在することで共感が生まれ、自助、共助、公助のバランスの取れたまちづくりが期待できる。

岡本（おかもと）　眞理（まり）さん

添え木の会代表

（元浜松生涯学習ボランティアの会会長）

[岡本眞理さん]
添え木の会の活動を通して、生涯学習を推進し、多くの方々の生きがいづくりをサポートしていきたいと語る。

●充実した生涯学習環境

子育てが一段落したころ、女性の社会進出や自立に興味を持ち「可美女性学級講座」に申し込んだことが生涯学習に携わるきっかけ。その後、主任児童委員や生涯学習推進員など、様々な活動をしていく中で、多くの人々に寄り添って、共に学んで成長をしていきたいと考えるようになり「添え木の会」を立ち上げた。

現在は、可美協働センター生涯学習ボランティアとして、今まで学んできたことを地域の皆様にお伝えする場をいただいている。浜松市内には協働センターが多いため、充実した生涯学習に取り組むことができる。

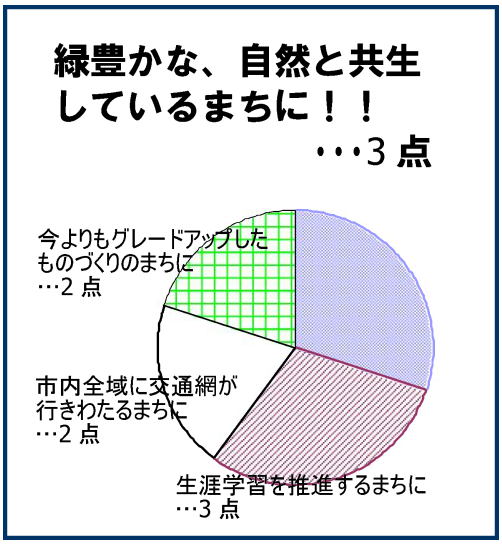
●駅周辺に文化施設や憩いの場が少ない

浜松市駅周辺部には、美術館などの芸術や文化に関する施設が少ない。また、緑の豊かさや憩いの場も少ないのではないか。駅に降り立ったとき「ホッとするまちだ」と感じられる環境を整備してほしい。さらに、駅周辺部への流れが滞っているとも感じている。これは、公共交通網が発達しているとは言えないため。車の運転をしない人たちにとっては、中心部へ出かけることが難しい。

●できるときに、できる人が、できることをする

今後、超高齢社会になることが予想されている。高齢者が健康で自立した生活を過ごすためにも、生涯学習に取り組み、人との関わりあいを持ってコミュニケーションを図ることが大切ではないか。生涯学習をサポートする側も、それぞれが得意な分野で活躍することで、双方が輝いた生活を過ごすことができると考えている。

浜松市は、生涯学習が非常に進んでいるまちなので、これからも活動の場を広げていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

特に植物には、心身に対してよい影響を与える力があるので、地球の自然環境にも関心を抱いて、人々が住みやすいまちづくりになるような学習を進めたい。

●生きがいを持てるまちに

都市計画の中では、まちの景観を重視してほしい。美しい自然の見た目と香りで、豊かな心を育てることが、明るい社会づくりにつながる。私自身、アロマテラピーやハーブの持つ力に注目している。多くの方々に、植物が発する効用を体験していただく講座の開催も予定している。今後も活動の幅を広げる要素はあるので、女性や高齢者が生きがいを持って活躍できるまちにしていきたい。

小栗（おぐり）　重晴（しげはる）さん

公益社団法人浜北青年会議所　理事長

［小栗重晴さん］
子どもたちの未来のために、人と人がつながり合い、助け合う「理想のまち」を目指したいと語る。

●全ては未来のために

「理想のまちを創造しよう～全ては未来のために～」

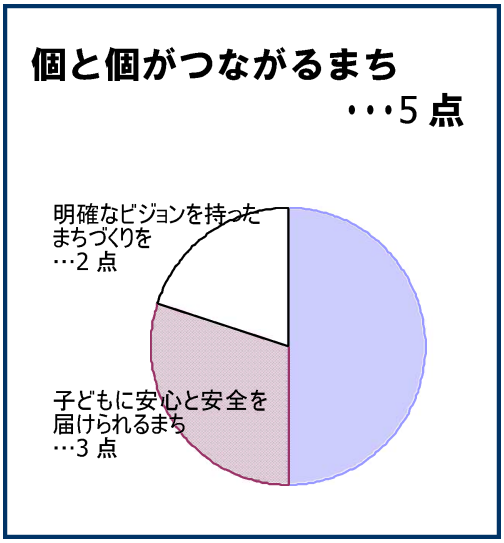
これは、浜北青年会議所（以下「JC」）の今期のスローガンである。私にとって「理想のまち」とは、交通網が整備され、行きたいところへ簡単に行くことができ、商業施設が整備され、欲しいモノがいつでも手に入る都市インフラの充実ではない。一人ひとりが他人を思いやる心を持ち合わせ、地域のために力を合わせることのできる社会。これが、「理想のまち」である。

●「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」を育てたい

会社では人を使う立場であり、社員と接して特に感じることは、教育の大切さである。勉強を教えること、テストで良い点数を取ることではなく、「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」をいかに育てるかが重要である。「失敗する前に教えてほしかった」という考えは社会では通用しない。自発的に学ぼうとする姿勢は、社会に出て身に付くものではなく、子どもの頃からの教育で自然と備わっていくものである。学校だけに依存するのではなく、地域が、社会が一体となって「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」を育てて行きたい。実際に JC でも、「考える力の醸成」を目的とした事業を実施し、未来を担う子どもたちの育成に力を入れている。

●親を見て子は育つ

近年、子どもが犠牲者になる報道が目立つように感じる。その中には親からの虐待に関する報道も相当数あり、心を痛めている。これは、親世代のコミュニケーション能力が低下しているのが原因ではないかと考えている。特に浜松は地域の結びつきが強く、結束力が成長の原動力となってきたまちである。それが、近年の様々な通信機器、コミュニケーションツールの氾濫により、人と人との対面機会が減少しており、つきあい方がわからない大人が増えてきたことが、社会の大きなゆがみとなっている。子は親を手本として成長するのであるから、現在の親世代にコミュニケーション能力を身につけてもらわなくては、子ども世代にも悪影響が出る。



【浜松市への期待度グラフ】

●明確なまちづくりのビジョンを

30 年後の浜松をどうしたいのか、選択肢は無数にある。世界に誇るものづくり企業に代表される工業都市、全国でも有数の生産高を誇る農業都市、もちろん商業都市や観光都市を目指す選択肢もあり、そのポテンシャルもある。まちの未来予想図は行政のみが描くことができるものであり、その責任は重い。ビジョンが明確に示されれば、おのずとまちの形も決まってくるため、慎重かつ大胆なビジョンを期待する。

小栗（おぐり）　勝（まさる）さん

浜松学院大学名誉教授　浜松市社会教育委員長

[小栗勝さん]
浜松は世界都市としての自覚がまだまだ不足している。

●全年令対象の教育システムの充実を！

これまで人類が経験したことのない超高齢社会やネットワーキング社会の到来を見据えると、次代を担う若者の教育が極めて重要。ICT キッズ育成などはその一例である。

また、時代に適合した中堅の育成に向け、特に、社会科学系の高等教育機関（大学）を設置すべきである。大学と行政や企業との人的交流を図り、政策や企業活動の現場に社会科学的システムアプローチを持ち込むとともに、学問にも現場の実情をフィードバックできるなど、大きな地域メリットが生み出される。

さらに、高齢者の知恵を社会に還元できる仕組みや、様々な社会教育の取り組みの成果を地域社会が共有できる環境をつくっていくことが重要である。

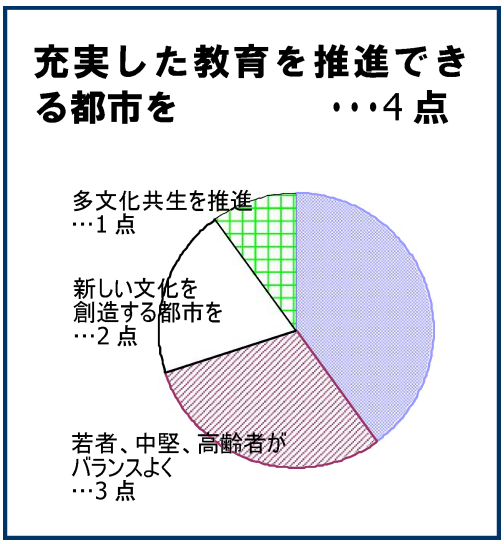
●地域のダイバシティマネジメントを！

私たちが直面する知識社会では、異なる立場で異なる意見を持つ人々が互いにコミュニケーションし新しい考えを生み出すことが可能であり、それを生かすことが重要になってくる。

浜松が持つ進取の気性とチームスピリッツ、外国人集住都市といった特徴を活かし、世界都市としてその先駆けとなるためにも、アファーマティブアクションや、市内の活発な市民活動を結ぶなどして、多文化共生や男女共同参画を一層進めるべきである。

また、WEB をバックグランドとして、人と人との交流を一層盛んにし、浜松における新たな産業集積を目指して長期スパンで取り組むことも必要。

今までと違いこれからの時代は、絶えず変化する中で、多様なプロジェクトを同時進行させなければならない。行政はその支援やマネジメントの有効性向上のために、これを担う人材の育成を進めるべきである。



【浜松市への期待度グラフ】

●世界があこがれるまち「浜松」を！

浜松は、山、海、川、湖など、自然環境に恵まれ、輸送機器や電子機器など様々な産業があり、ピアノコンクールをはじめとした、音楽文化を身近に感じることのできる都市でもある。

浜松にはまだまだ多くの気付かれていない魅力があり、まずは、そうしたアトラクティブなものをたくさん見つけることから始めてはどうか。

そして、サンディエゴや京都のように、自らの特色を上手に活かしながら伝統を受け継ぎつつ新たな文化を創造する都市を目指してほしい。

尾崎（おざき）　真（しん）さん

日立建設株式会社　代表取締役

［尾崎真さん］
浜松の未来を担う子どもたちに、助け合いの大切さを身につけてもらうための活動を続けていきたいと語る。

●温暖な気候と自由な発想

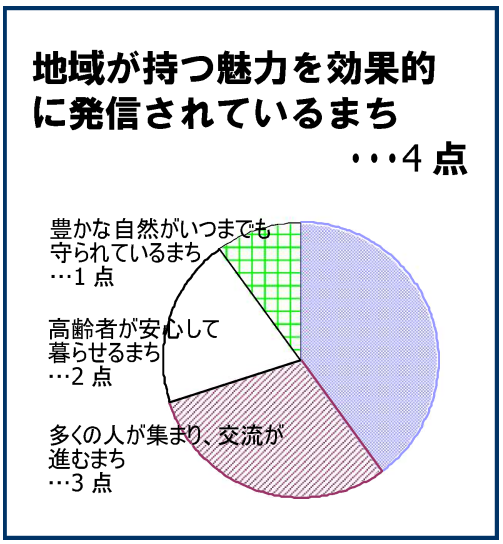
浜松は温暖な気候の影響で、豊かな自然に囲まれたまちである。これは、住宅を建てる際にも好条件である。豪雪地帯や台風が多く通過する地域では、屋根の形や窓の大きさに制限がかかってしまうが、この地域では、自然環境により住宅のデザインが制限されることはない。お客様の共通するニーズは、耐震の強度くらいである。温暖な気候により生活に制限を受けず、自由な発想をしやすい環境は、ものづくりのまちとして浜松が発展してきた礎となっているのではないか。

●つながらないまちにより、人の絆は断ち切られようとしている

まちなかの衰退が危惧されて久しい。まちなかには文化施設や病院、店舗などが多く立地しているが、それらをつなぐ動線が確保できておらず、人々が集まり、交流する場がない。その影響なのか、人とのつながり、絆、協力といった意識が薄くなってきているように感じる。私の会社でもそうだが、魅力的な商品がなければ人は来てくれない。まちなかにも人々の興味をひきつける魅力的なイベントを多数行うことができれば、人が集まり、交流が進み、絆も取り戻せるのではないか。建設業に携わる身としても、人と人をつなぐまちづくりの一翼を担っていきたい。

●まちづくりは人づくり

30 年後を見据えたまちづくりのために重要なのは、「人づくり」である。まずは、未来を担う子どもたちに協力の精神を身に付ける教育が必要である。私は青年会議所にも所属しており、子どもたちを対象にしたイベントを多数実施している。教育と言っても、押し付けではなく、大人が混ざって、協力、共助の大切さを体験を通じて実感させていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●魅力の再認識と発信を

浜松の魅力は、食べ物、自然、文化と、挙げればきりがない。これだけ恵まれた環境に育っていると市民は「あって当然」と思ってしまい、このまちの本当の魅力を自覚できていない。浜松の素晴らしさを再認識し、強く発信していくことができれば、今まで以上に人を呼び込めるのではないか。静岡県や浜松市は、「通過するまち」と揶揄されることもある。しかし、多くの人が一瞬でもこの地に足を踏み入れているのであれば、「ちょっと寄ってみようかな」と思わせるだけでよく、遠くから人を呼び込む必要すらない。大都市の中間であることを最大限に活かすべきである。

小田切（おだぎり）　克子（かつこ）さん

行政書士・社会保険労務士・ファイナンシャルプランナー
男女共同参画アドバイザー

［小田切克子さん］
女性の経済的･精神的自立を応援するため
精力的に活躍されている。

●1 日を楽しめるまちづくりを

仕事などで他都市の人と関わることが多いが、市内企業を話題にすると浜松のことを早くわかってもらえる。それだけ日本・世界を代表する企業が輩出している都市と言える。また、海や山など浜松市は大自然にも恵まれているが、他都市からのお客様や友人に案内する観光地や名産品はあまりない印象。

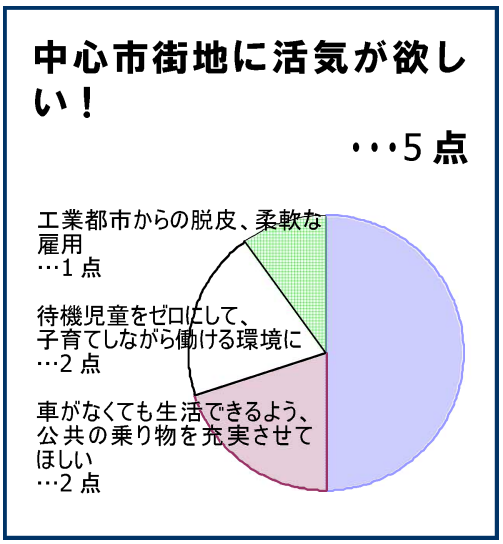
中心市街地も静岡市と比較すると活気が足りないと感じる。浜松で 1 日を楽しめる空間づくりが必要だ。

●目指せ！待機児童ゼロ

浜松市は待機児童が多い。認証保育所をもっと活用するべきだ。認証保育所と認可保育所を比べた場合、一般的には認可保育所の方が人気は高いが、認可保育所は定員いっぱいで保育士の目が行き届かないのではないかと心配し、人数に比較的余裕のある認証保育所を求める保護者もいる。認証保育所への支援を拡充することで、入所数のアンバランスを解消できる。ぜひ待機児童をゼロにして、子育てしながら働ける環境をつくってほしい。

●「働き続けられる」「再就職できる」「起業できる」環境づくりを

今後の少子高齢化を考えた場合、いかに働き手を確保するかが重要であろう。そうした点からも、女性が働く上での支援は必要である。女性の起業に対しては、資金面、あるいはオフィスの提供等のバックアップを行政としても積極的に行っていくべきだ。そして、女性が結婚・出産をしても、「働き続けられる」、退職しても「再就職」や「起業」ができる、そのような環境づくりを同時進行で整備することが重要だ。



【浜松市への期待度グラフ】

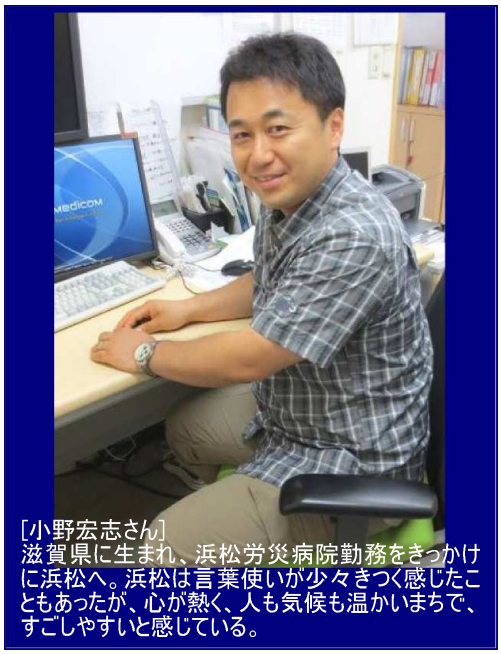
●真のワークライフバランスを目指して

市内企業に対して、ワークライフバランスの講義を行っているが、まだまだ認知度が低い。少子化を食い止めるためには、男性を含めすべての働く人のワークライフバランスを整えていくことが必要だ。ライフを充実させることが、ワークの充実にも繋がる。つまり、ワークライフバランスの考え方は、女性だけのものではなく、男性にとっても、雇用者・会社にとっても大切な考え方である。

工業都市である浜松は、この分野はまだまだ発展途上である。真のワークライフバランスを定着させ、男女共同参画社会を構築することを目指していきたい。

小野（おの）　宏志（ひろし）さん

坂の上ファミリークリニック　院長



[小野宏志さん]
滋賀県に生まれ、浜松労災病院勤務をきっかけに浜松へ。浜松は言葉使いが少々きつく感じたこともあったが、心が熱く、人も気候も温かいまちで、すごしやすいと感じている。

●患者、家族、社会を支える医療に取り組む

坂の上ファミリークリニックを開院して 8 年。患者を支え、家族を支え、社会を支える医療に真剣に取り組んできた。外来診療だけでなく、往診を発展させた在宅医療に力を入れている。地域社会で見守るという観点から、在宅医療の必要性は益々増大する。

住み慣れた我が家で安心して看病を受け、充実した医療を受けられることは、患者にとっても家族にとっても大切なこと。

今後も、患者や家族が不安にならないよう、地域社会のの一員として様々な問題に対処していきたい。

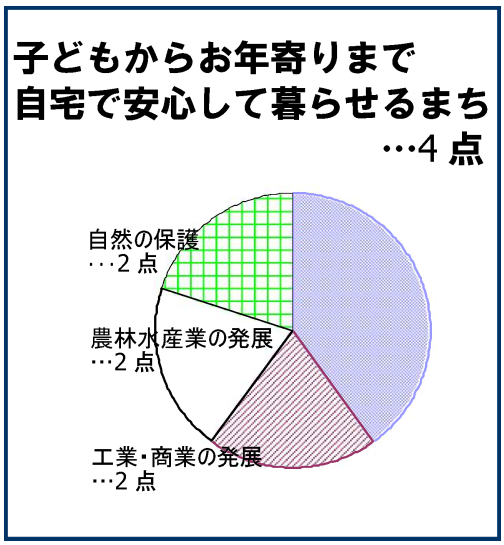
●浜松市は浜松市民がつくる

浜松市は、山間地から海、湖まで、豊かな自然に恵まれ、“やらまいか”の市民気質を土壌に、世界に誇る産業などが成長してきた。また、救急やホスピス等、医療体制も他都市に比べて整備されている。

ただ、日本全体の傾向かもしれないが、最近“やらまいか”気質が弱まってきていると感じる。高齢化が進み、人口が減る中で、行政だけに頼ることなく、国は国民が、市は市民がつくるという気概が必要。浜松市は浜松市民がつくるものとして、これからの時代こそ“やらまいか”気質が問われてくる。

●自宅で最後まで暮らせるように

在宅医療に取り組み、これまでに、およそ 1,500 人の患者を本人の自宅で看取ってきた。



【浜松市への期待度グラフ】

自分の家族の命は、人任せではなく、自分が責任を持ち、自分たちで看取る。つらいこともあるが、最後まで看取ることで、気持ちがつながれていき、命が受け継がれていくことを実感できる。その経験は必ず人生の糧となる。

超高齢社会を迎え、人と人とのつながり、家族のサポート、地域のサポートが益々重要となってくる。30 年後に向けて、子どもからお年寄りまで自宅で安心して暮らせるまちづくりを望む。私自身、家族を想う優しい気持ちと、住み慣れた家で家族と一緒に暮らしたいという患者の気持ちを応援し、安心して暮らせる地域社会づくりに引き続き貢献していきたい。